

チベット・アムド地域における婚姻・家族と親族名称に関する研究: 中国青海省貴徳県S村の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ガザン メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47171

チベット・アムド地域における婚姻・家族と 親族名称に関する研究 －中国青海省貴徳県 S 村の事例から－

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
ガザン (尕藏)

要旨

本稿は、チベット族の婚姻・家族と親族名称に関して、先行研究と参与観察や聞き取りに基づく人類学的フィールドワークによる調査資料を分析して作成したものである。チベット族の婚姻形態は一般に一夫一妻制であるが、経済的理由で複数婚姻形態も行った例はいくらか存在していた。婚姻する際には、「骨系或いは家系」をよく調べた上で、村単位のコミュニティ内において恋愛、見合い結婚するのが一般的である。しかし、2000年代の西部大開発以降のインフラ開発の進展、市場経済化などの影響を受けて、村単位の地域コミュニティを超えて恋愛し、自由恋愛結婚が増えている。

本稿では、まず、チベット族の婚姻・家族に関する先行研究を分析し、チベット族の婚姻形態と「骨と血」の出自について述べる。次に、調査対象の S 村落での聞き取り資料を事例として、チベット・アムド地域の婚姻・家族について論述し、アムド地域の親族名称について記述する。最後に、2000年代の西部大開発のインフラ開発や出稼ぎの影響によって、チベット・アムド地域の婚姻が自由恋愛結婚になりつつある傾向、婚姻と家族の形態の変化について考察する。

キーワード

チベット・アムド地域、婚姻、家族、親族名称

Marriage, Family, and kinship among Amdo Tibetan people － Case studies from S village in Guide county, Qinghai province, China －

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

GAZANG

Abstract

The paper focuses on the marriage, family, and kinship among Tibetans based on the previous studies and fieldwork. Marriages in Tibet are generally monogamous. However, some cases of polygamous marriages also exist due to economic reasons. Research indicates that getting married via a blind date with someone in the same village was common in Tibetan. However, with the establishment of the market economy and the economic development in recent years, there have been an in in marriages for love and beyond the geographical boundaries.

The paper begins by analyzing previous studies about marriage and the family system in Tibet, and then

describes the types of marriage and "bone and blood," a traditional concept among Tibetans. The second part of the paper deals with case studies from the S village, and describes the marriage, family, and kinship among Amdo Tibetans. Finally, the paper discusses the impact of recent social changes on the Tibetan marriage system; such as the Economic Development Plan on the western areas and the movement of young people to big cities for wage labor.

Keyword

Amdo Tibetan, marriage, family, kinship

一. はじめに

本稿の研究対象であるアムド地域の婚姻のみならず、チベット全地域にとって、結婚する際に、「骨系或いは家系」、調査地で「ムジェ、チムジェ」(mi rgyud人・系, khyim rgyud家・系)とも呼ぶが、家系をよく調べた上で、村単位のコミュニティ内において恋愛、見合い結婚するのが一般的である。しかし、21世紀に入ってから、西部大開発以降のインフラ開発の進展、市場経済化などの影響を受けて、村単位の地域コミュニティを超えて恋愛し、自由恋愛結婚するのが主流になりつつある。

チベット族の婚姻に関する先行研究の中で、様々な理由(経済的な理由はMelvyn C. Goldsteinの指摘、精神的な理由はNancy E. Levineの指摘: 六鹿2011, 大川2007)で行った複数婚姻形態について、外国人は興味を持っているようであるが、アムド地域では、青海省ゴロク(果洛・チベット族自治州の一部の地区)を除いて複数婚姻は習俗的、伝統的に禁止し、厳密な外婚制がある。

現在発見されている古代チベットの結婚に関するボン教の古文書の中で、人間の最初の婚姻はどのように発生したか、具体的な結婚の過程、儀式などが詳しく記載してあり、天から降りてきた女と地上の男が結婚した。その古文書の名は『ming sring dpal bgos dang lha `dogs』(Samten, G Karmay and Yasuhiko Nagano 2002)と呼ばれ、この古文書を通じて、チベット族の婚姻形態

は太古から一般的に一夫一妻制であり、結婚の時、嫁側の親族の地位が高く¹、婿側の地位が低いのが分かった。

本稿では、まず、先行研究が少ないチベット・アムド地域における婚姻と家族の形態を明確にするため、他チベット地域の婚姻形態や骨系、家系に関する先行研究をまとめて分析し、アムド地域における婚姻と家族の形態の事例を取り上げながら、チベット族の婚姻と家族の形態、親族名称について述べたい。さらに、西部大開発のインフラ開発や出稼ぎの影響によるチベット・アムド地域の自由恋愛結婚になりつつある傾向、婚姻と家族形態の変化について考察する。

二. 調査地の概要

本稿のデータはチベット・アムド地域²或いは青海省(チベット語: ツォルゴ མོ་ལོ་མོ་མོ mtsho sngon, 面積: 721,000 km²) 海南(チベット語: ツォロ མོ་ལོ་མོ་མོ mtsho lho, 面積: 33,210 km²) チベット族自治州貴徳(チベット語: ティカ ཧི་ཀ་ཀྲམ་ཀམ་ khrai ka, 面積: 3462.71 km²) 県S村落で収集したものである。

青海省は1928年に成立し、省名は、省内に国内最大の湖沼である青海湖があることに因む。青海省の行政区画は、地級市と自治州と二つの枠組みで構成されており、地級市は西寧市と海東市である。自治州は玉樹、ゴロク(果洛)、黄南、海南、海北のチベット族自治州及び海西モンゴル族自治州である。

青海省の領域の大部分は、「アムド地域」に属し、アムド地域の西部から中央部を占めており、青海省政府が管轄する自治州の中で、東南部に位置する玉樹一帯のみ、チベット・カム地域に属する。言葉もチベット語・アムド方言³である。

調査対象のS村の行政の変革としては、現在常牧鎮に属しているが、1956年に東溝郷に属した。1959年に常牧公社に属し、1961年に東溝・周屯公社に属した。1965年に東溝と周屯公社が合併して東溝公社を形成した。1984年に公社を郷という行政の単位に変更して東溝郷に属した。2006年8月に、青海省政府の許可を得た上で、常牧郷と東溝郷は合併して常牧鎮として、「鎮」という行政単位になった。

常牧鎮は貴徳県の東北に位置し、県政府所在地と20Km離れている。『2011年貴徳統計年鑑』によると、常牧鎮の総戸数は4,732戸、総人口は18,085人であり、この中の男性は9,058人、女性は9,027人であった。

常牧鎮の宗教については、仏教、ボン教、シャーマニズムなどが共存しており、民族も蔵族のみではなく、他に4民族が共存している。以下に各民族の人口を表示する。

表1 2011年常牧鎮各民族の人口統計表

単位：人

2011年常牧鎮各民族の人口統計表					
	総人口	藏族	漢族	回族	土族
男	9,058	7,509	1,466	65	18
女	9,027	7,633	1,314	64	16
合計	18,085	15,142	2,780	129	34

(出所：2011年貴徳統計年鑑により筆者作成)

S村は、周辺の村と比べると、仏教ゲルク派、ニンマ派、ボン教と三つの宗派が共存している。周辺の村は仏教を信仰している集落である。

三. アムド地域における婚姻・家族

3.1 先行研究におけるチベット族の婚姻

アムド地域で収集した一次資料や他チベット地域の婚姻に関する調査資料から、チベット族の婚

姻形態は一般的に一夫一妻制であるが、経済的理由で複数婚姻形態も以下のようにいくらか存在していたことが分かる。

以下にアムド地域の婚姻形態を明確にするため、他チベット地域と共通する一夫一妻婚制や骨系、家系についての先行資料を引用する。

「現在、錯那村（チベット自治区那曲地区安多県に属する）では、一夫一妻の婚姻制度が行われている。1959年以前には、チベット牧畜地区では、「一妻多夫」の婚姻がかなり多かった。今、錯那村では、「一妻多夫」婚姻は1例もない」（包智明1992：55）。雲南省迪慶族自治州に属するj村で調査を行った六鹿桂子氏によると、「j村には現在一妻多夫婚や一夫多妻婚をしている夫婦はいない。ただ兄弟型一妻多夫は1900年代初め頃に1組だけあった。姉妹型一夫多妻婚も1980年頃にしていた村民はいたが、現在その村民は、その姉妹の中の一人と一夫一婦婚の形で結婚している。つまりj村では以前から一妻多夫や一夫多妻婚という婚姻形態がおこなわれてこなかったわけである」（六鹿2007：49）。このような民族誌的な事例から現在チベットの婚姻形態は主に一夫一妻制であることが窺える。

しかし、WuQi氏が行った2012年のインタビューによると、四川省松藩県の一部の地区で一妻多夫婚の例も少ないが、見ることができると。「松藩県川主寺鎮伝子溝村 Ngag dbang tshe ring bkra zhis 氏によると、我が村（伝子溝村）は50世帯があり、その中で一妻多夫婚は3世帯のみ存在しているのが分かる。我がツォワ（氏族）は12世帯あるが、一妻多夫の例はない。40代以下の村人の中で一妻多夫婚の例はない」（WuQi2013：108）。

婚姻は夫婦により構成され、生育団体を形成し、世帯を継承するためのものである。チベット全地域では、「骨系」（チベット語：リュパrus pa）とよくいう。「チベット系社会の多くには、男系出自を表現する〈骨〉の観念が存在し、父親からその子供達には同一の〈骨〉が引き継がれるとされる。〈骨〉を共有する者は、たとえ明確な血縁関

係が存在しない場合にも共通の先祖から分かれてきたとされ、彼等同士での結婚はインセストを犯すものとして厳しく禁じられる」(棚瀬1991:160)。「あなたのリュバはなにですか」と聞くと、「父のは××、母のは××です」と父と母両方の骨系をともに答える」(包智明1992:56)。「これらの父系血縁グループをruibaすなわちチベット語で「骨」を意味する語で呼ぶときには、これはまず父系そのものを指す。たとえある家族に息子がなく娘ばかりがあり、そのため婿養子をとっても、婿の骨は決して養家の父の骨に変えられることはない。(中略)娘ばかりなら、その家系の骨は、まぎれもなくその次の世代で断絶する。しかしこの場合、「家系相続」とは何を意味するのかを明確に示した論者は殆どない。(中略)家産の相続という意味での家系相続のためなら婿養子は役立つが、父系の血統を相続するという意味での家系相続なら、婿養子は完全に無意味である。(中略)このように、父系と母方の父系とを「骨と肉」あるいは「骨と血」というような組み合わせで表現し、人間がこの双方を備えねば不完全であるとするような観念は、チベット人のみならず幾つもの北方ユーラシアの民族に見られる」(川喜田1966:13)。しかし、ウ・ツァン地域(西藏自治区ラサ市を中心した周辺地域)又は西チベットにおいて結婚する際に、「同じ骨の者同士は、絶対に結婚できない。すれば近親相姦である。実際そんな例はひとつも現存していない。しかし同じ肉の者同士の結婚は許される。そして少数例ではあるが現存している」(川喜田1966:13)。

I・デシデリ氏によると、「同じ骨の2つの親族の間の性交は、近親相姦とみなされ、すべての人が忌避し、ひどく嫌う。同じ血もまた、結婚に対して親族関係の中では最高の障害となる。したがって、おじとその姪の結婚は許されない。しかし、母方の実のいとこの結婚は許され、それはよく見られるところである」(薬師1991:296-297)。

以上のように、「チベット人は2つの親族関係を認めている。その1つはリュバ・チク、つま

り「同じ骨」の親族関係と呼ばれ、もう1つはシャ・チク、「同じ血」の親族関係である。彼らはリュバ・チク、同じ骨の親族関係として、たとえ、いく世代にもわたっていろいろの分家にわかれてきたとしても、そしてどれほど遠くても、共通の祖先から系統を同じくする人たちを認めている。シャ・チク、同じ血の親族関係は正規の婚姻によってつくられた人たちである」(デシデリ1991:296)。

上述の先行資料のように、アムド地域でも、「近親結婚は禁止であり、厳密な外婚制がある。同じ「骨系」は絶対に通婚してはいけない」(金晶2009:162)。

先行研究の資料を見ると、21世紀に入るまで、チベット全地域の婚姻に関するもう一つの共通点は通婚範囲の狭さであり、ほとんど村落と郷の範囲内に限られる。村人の話によると、アムド地域でも同じように、通婚範囲はほとんど村落内である。調査対象のS村内の30代以上の夫婦はほとんど村内の通婚であり、村外からの嫁或いは婿の例が少ない。なぜならば、2000年以前、若者たちが知り合う機会としては、村内の仕事や夕方に行う村の下手までの水汲み、晩御飯後の村民館でのドラマ放映会などであり、村を出て出稼ぎなどに行く習慣がなかったため、若者たちが村外の人と知り合う機会がなかったのである。村内で通婚したら、結婚の過程も非常に簡単であり、結婚に適した年齢⁴であれば、両親の承認で十分であった。

西部大開発におけるインフラ開発以前、チベット族の婚姻形式は伝統的であり、結婚の過程も非常に簡単で、離婚の過程も簡単であった。結婚する際に、「役所に行って、法律的な手続きをする必要もないし、結婚に対してのお祝いも家族内に限られる。(中略)離婚は結婚と同じように手続きが簡単である。法律的な手続きも必要でなく、夫婦2人が分れて住めば、社会的に離婚と認められる。財産と子供の扶養の問題は、2人のあいだで決める」(包智明1992:55)。

以上に述べた先行研究のように、現在は、チベット族の一般的な婚姻形態は一夫一妻婚であり、一

妻多夫婚の例はわずかである。結婚する際に、「骨系或いは家系」をよく調べた上で通婚するのが一般的であり、同じ骨の者同士は、絶対に結婚できない。すれば近親相姦であると認識しているからである。しかし同じ肉の者同士の結婚は許される。骨系或いは家系を調べてから通婚するのがチベット族の伝統的婚姻習俗である。

以下では、調査対象のS村の事例を中心にしながらアムド地域の婚姻と家族について述べる。

3.2 アムド地域における婚姻

アムド地域においても、「骨系或いは家系」をよく調べた上で、通婚するのが一般的である。「骨系或いは家系」を調べる際、地域の人々は大きく二つの点について考えている。第一の点は「骨」であり、村民達の話によると、「骨」について浄の世帯と不浄の世帯があると言う。不浄の世帯は身体に変な匂いがする。その匂いの名は現地語で「セウル」と呼ぶ。浄の世帯は匂いがしない。不浄の世帯は現地語で「ムザンワ mi gtsang」と呼ばれている。また、もう一つの点は家の守護神であり、調査村内には、守護神の異なる家も存在する。異なる宗派徒はそれぞれ違う守護神を祀っている。仏教徒の多くの家の守護神はハデンラモ⁵ (dpal ldan lha mo) であり、ごく少ない家の守護神はチイラン⁶ (the' u ring 猫の姿) である。

そのような浄の世帯と不浄の世帯、異なる守護神の存在があるため、結婚する際に、浄の世帯と不浄の世帯は結婚できず、異なる守護神の家間も結婚できない。

2000年以前には、婚姻する際に、一般的に不浄の世帯は不浄の世帯間で結婚し、浄の世帯は浄の世帯間で結婚していた。異なる守護神の世帯も異なる守護神の世帯間で結婚できず、同じ守護神の世帯間で婚姻を行っていた。

浄の世帯の息子（又は娘）が不浄の世帯の人と結婚すると、子供の世代から身体にセウルの匂いがし、不浄の世帯となる。そのため結婚ができない。しかし、2000年以降は、村の若者達は村落を離れて出稼ぎに出かけ、その影響や市場経済の発

展と共に、結婚恋愛が自由になり、浄の世帯と不浄の世帯間で結婚している例も、少数例ではあるが見られるようになった。

事例1：

2005年、S村落のある男（現在32歳）と女（どちらもS村の人）が自由恋愛し、結婚するつもりだったが、男の方が不浄の世帯であったため、女の方の家族が許さなかった。そのまま2年後、子供ができたため、女の方の家族も仕方なく、結婚することを許した。

事例2：

2009年、S村落のある男（現在27歳）と女（どちらもS村の人）が自由恋愛し、結婚するつもりだったが、男の方が不浄の世帯であったため、女の方の家族が許さなかった。そのまま1年半が経ち、女の方の家族も仕方なく、結婚することを許した。

事例3：

2001年、S村落のある男（現在35歳）と女（どちらもS村の人）が自由恋愛し、結婚するつもりだったが、女の方が不浄の世帯であったため、男の方の家族が許さなかった。半年後、男の方の家族も仕方なく、結婚することを許した。

以上の3つの事例でわかるように、2000年以降、浄の世帯と不浄の世帯間でも、通婚できるようになった。しかし、2000年以前、S村落に浄と不浄の世帯間で結婚する習俗が一切なかったわけではなく、通婚している例もわずかにあった。

事例4：

1987年、S村落のある男（現在49歳）と女（どちらもS村の人）が結婚した。男は不浄の世帯であり、女は浄の世帯である。現在、28歳の女の子と25歳の男の子がいる。子ども2人とも不浄の世帯の人と結婚している。

2000年に実施した西部大開発以前は、通婚範囲はほとんど村落内に限られ、村内の男（又は女）と結婚したら、結婚の過程も非常に簡単であった。しかし、親族間やツォワ内（氏族）では通婚できないという外婚制がある。一方、アムド地域でも、親戚であっても、同じ肉の者同士の結婚が

許される例がわずかに存在する。

事例5：

2007年、S村落のある男（現在28歳）と女（どちらもS村の人）が自由恋愛で結婚した。男の父の母と女の母は姉妹である。最初は、女の家族が反対したが、そのまま2年後に子どももできたため、女の家族も仕方なく、結婚することを許した。

事例6：

1998年、S村落のある男（現在34歳）と女（どちらもS村の人）が見合い結婚した。男の母の母と女の母の母は姉妹である。

以上のようにアムド地域でも、同じ肉の者同士の間は結婚が許される例がわずかに存在した。

アムド地域において、1983年より、結婚の登記を行うように政府は要求していたが、2000年まで、実際に登記していた例は少なかった。2000年代初めから、子どもを戸籍簿に記載するために、子どもの両親の結婚証が必要になった。その時から結婚したら、すぐ政府に登記する傾向となった。現在でも、S村落において、50代以上の夫婦で結婚証を持っていない例は多い。2000年に入るまで、チベットの婚姻形式は伝統的であり、結婚の過程も非常に簡単であったが、離婚の過程も簡単であった。

西部大開発によるインフラ開発まで、通婚範囲は村落内に限られており、村内で結婚したら、離婚率も低い。しかし、西部大開発以降から、以下の表2で示しているように、村内の人同士で結婚

表2：現在のS村落の結婚

夫	妻	結婚の年	形態	村内/外
A (29歳)	a	2006	嫁入り	外
B (32歳)	b	2008	嫁入り	外
C (28歳)	c	2010	嫁入り	外
D (29歳)	d	2013	嫁入り	外
E (29歳)	e	2014	嫁入り	外
F (27歳)	f	2008	嫁入り	内
J (34歳)	j	2006	婿取り	外
H (31歳)	h	2010	婿取り	外
I (26歳)	i	2014	婿取り	外

●この表の中の妻の詳細な年齢は不明である。

(出所：2016年7月現地調査により筆者作成)

する例は少なくなっている。

アムド地域において、浄の世帯の男（又は女）はチラン (the' u ring) を守護神として祀っている世帯の人と結婚しない。チランを祀っている世帯と結婚すると、子供の世代から不浄の家系となってしまうため、アムド地域の習俗として非常に注意をする。

事例7：

インフォーマント (56歳の男性、仏教徒) は、守護神がチランである世帯とはあまり喧嘩もしない方がいい、チランの人が怒ったら、絶対に思い掛けないことが起こると話してくれた⁷。

しかし、現在は、西部大開発のインフラ開発と市場経済化の発展と共に、嫁不足や村人の出稼ぎなどの影響で、違う守護神であっても、不浄の世帯の人であっても、結婚する例は増加している。

表3：S村落の違う守護神の間の婚姻

夫	妻	守護神	結婚の年	形態
A	a	夫はチラン 妻はハデンラモ	1984	嫁入り
B	b	夫はハデンラモ 妻はチラン	2006	嫁入り
C	c	夫はハデンラモ 妻はチラン	2008	嫁入り
D	d	夫は不浄の世帯、 ハデンラモ 妻はハデンラモ	2011	婿取り
E	e	夫はチラン 妻はハデンラモ	2014	嫁入り

●この表の中の夫婦の詳細な年齢は不明である。

(出所：2016年7月現地調査により筆者作成)

以上のようにチベット伝統的社会背景においては、アムド地域では、結婚するとき、結婚相手の家系あるいは骨系を調べた上で、通婚するのが一般的であるが、表3で示すように、西部大開発以降から、違う守護神であっても、不浄の世帯の人であっても嫁不足などの原因で通婚する例も見られるようになった。

結婚後の居住については、夫の家族と住むという夫方居住を原則とする。アムド地域である青海

省に属する黄南藏族自治州同仁県の婚姻居住制に関する先行資料によると、「ランジャ村 (Glingrgya 同仁県シュンボンシ郷政府に属する) において、ほぼ82.1%の婚姻は夫方居住であり、一方、17.9%の婚姻は妻方居住である」(Jixiancairang 2012:10)。調査対象のS村落でも、一般的に夫方居住である。

3.3 アムド地域における家族

チベット・アムド地域社会の「チム (khyim)」(家) の概念は共住、共食、共財の生活共同集団の親族単位を意味する。アムド地域に現存している世帯形態は、大家族と直系家族、核家族、単身世帯であり、中でも、村落社会にとって、大家族と直系家族は一般的な世帯形態であるが、2000年以降の西部大開発の影響やインフラ整備などの近代化、市場経済化などの影響で、若者達は出稼ぎに出かける傾向となった。また、1985年に政府は教育体制改革を決定し、1986年に実施した九年義務教育の政策などの影響で、子供達の進学率が高くなった。それらの影響を受けて、徐々に核家族

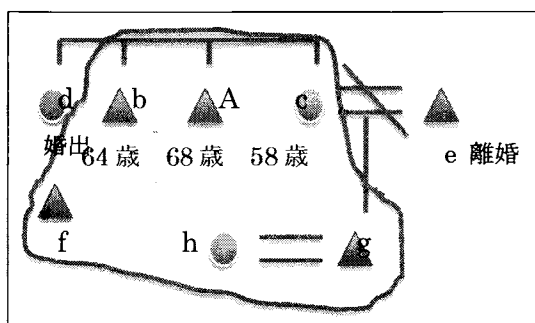
世帯も増加した。

S村の家族の人口規模は、ほぼ1～7人家族で構成されている。2016年3月に聞き取り調査をした20軒の家族人口規模を表4として取り上げる。

表4で示すように、S村では、家は1～4世代から成り立っており、2～3世代の人が一つの世帯として生活しているのが一般的である。

アムド地域における大家族は、「例えば、子供2人が結婚しても労働力を保持するため分家せず、1人が草原で牧畜業を行い、1人が村で農業を行いながら両親や祖父や祖母の面倒を見ている形である」(ガザンジェ 2015:92)。

例1：A世帯の家族構成



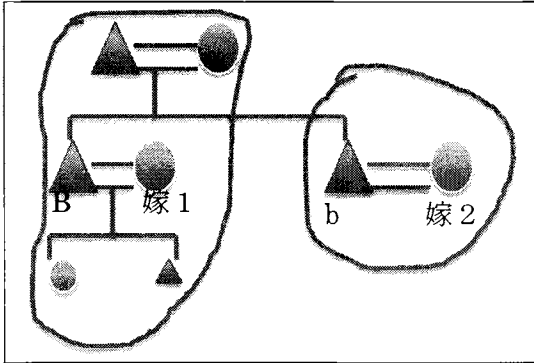
例1で示すように、A世帯は6人の家族で構成されており、64歳A氏の弟(64歳のb)と妹(58歳のc)、その妹(c)の息子(c)と妻(h)、婚出した妹(d)の息子(f)と6人である。58歳の妹(c)は婚出したが、離婚して息子(g)を連れて実家に戻った。64歳弟も婿に行ったが、離婚して実家に戻ってきた。68歳A氏は結婚できなかった。婚出した妹(d)の息子は中学校に進学している。そのため、6人は大家族として食事や生計などを共にし、生活の基盤である畑や家畜を共有して共同生活を送っている。

中根は「大家族形成の構造原理が兄弟(姉妹)の連帯にあったのに対し、直系家族のそれは、父-息子の継承線にあるということが出来る」と主張する(中根1973:101)。調査対象のS村落にとって、直系家族が一般的な世帯形態である。例として以下に取り上げる。

表4：S村の世帯規模

世帯	世代数(世代)	世帯人口(人)
①	3	5
②	2	3
③	3	7
④	2	5
⑤	2	4
⑥	2	4
⑦	2	3
⑧	3	5
⑨	3	5
⑩	3	5
⑪	1	1
⑫	3	7
⑬	3	4
⑭	3	6
⑮	3	7
⑯	2	3
⑰	3	7
⑱	3	4
⑲	4	6
⑳	3	5

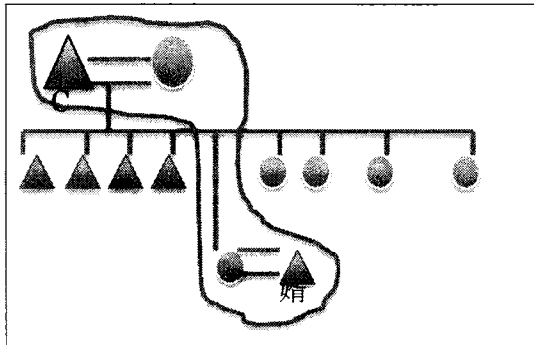
例2：B世帯の家族構成



例2で示すように、B世帯は6人の家族で構成されており、B氏の父母とB氏夫婦、娘と息子2人である。B氏は37歳であり、b氏は32歳である。父母は70歳代である。b氏も2010年まで結婚していなかったため、大家族として食事や生計などを共にし、生活の基盤である畑や家畜を共有して共同生活を送ってきた。その後2010年に結婚し、家の財産を分けられて分家した。父母の面倒は長男のB氏がみている。つまり、長男のB氏が家長の後継者であるが、上に述べた“骨系又は家系”としてはB氏とb氏の家の家系が同じである。

Bとb家はボン教の家であり、嫁1と嫁2は村外の仏教ゲルク派出身である。嫁入りしてからボン教に改宗したというが、日常唱えている経は仏教のターラー讚や六字真言などであった。

例3：C世帯の家族構成

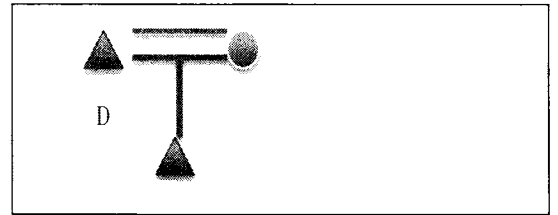


C世帯は4人家族で構成されており、C氏夫婦と娘と婿との4人である。C氏は81歳であり、妻

は85歳、娘は38歳、婿は40歳である。1958年以前、C氏は仏教ゲルク派の僧侶であり、民主改革などの政策により還俗して以降、一般人として働いた。妻はボン教の家出身であるため、ボン教を信仰している。妻が日常唱えているのが仏教の経であるが、自らはボン教徒であると認識している。婿は村外の仏教徒である。家の仏間に両教の神仏像が置かれていた。

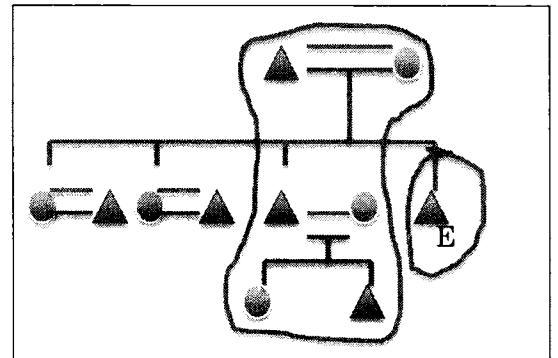
調査村に、夫婦と子供からなる小家族或いは核家族の例も少数見られる。以下に取り上げる。

例4：D世帯の家族構成



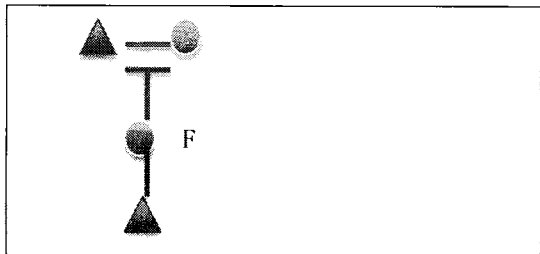
例4で示すように、D氏の世帯は3人家族で構成されており、D氏夫婦と子供との3人である。夫婦2人とも40歳代であり、宗派はニンマ派である。2004年に、畑の仕事をやめて、青海省ゴロク(果洛)チベット族自治州で商店を開いて商売している。子供は進学している。

例5：E世帯の家族構成



例5で示すように、E氏の世帯は1人で構成され、単身世帯である。40代であるが、まだ結婚できていない。1人で畑の仕事をしている。このS村には、単身世帯は3戸しかない。

例6：F世帯の家族構成



例6で示すように、F世帯は4人家族で構成されており、F氏の両親と5歳の子供である。F氏は33歳である。

以上のように、アムド地域の家族形態は一夫一妻婚であり、大家族と直系家族、核家族、単身世帯である。

四. アムド地域における親族名称

チベット・アムド地域では、親族をシャニ (sha nye肉・近い), シャチャ (sha khrag肉・血), ニイウ (nye bo) と呼ぶ。まず、以下に人類学の基本的親族名称を取り上げ、それに従って、「自分」と関係するアムド地域の基本親族名称について述べる。

表5：人類学の基本的親族名称

E (Ego) = 自分	B (Brother) = 兄弟
F (Father) = 父	Z (Sister) = 姉妹
M (Mother) = 母	H (Husband) = 夫
S (Son) = 男の子	W (Wife) = 妻
D (Daughter) = 女の子	

(出所：格楽 1993：210)

表6：S村とその周辺の村の親族名称

世代	チベット語		日本語読み		親族関係
	S村	周辺の村	S村	周辺の村	
2	པའོ	ཕ་མུ	バボ	アニヤ	FF,MF,
2	ཕ་ཞེ	ཕ་ཞེ	アニイ	ガガ	FM,MM
1	ཕ་མུ	ཕ་མ	アジャ	アパ	F
1	ཕ་མ	ཕ་མ	アマ	アマ	M
1	ཕ་ཁུ	ཕ་ཁུ	アク	アク	FB
1	ཕ་ཞེ	ཕ་ཞེ	アニイ	アニイ	FZ,WM,
1	ཕ་ཁུ	ཕ་ཁུ	アシャン	アシャン	MB,WF,
1	མ་མ	མ་མ	ママ	ママ	MBW
1	ཕ་མུ་མལ་པ	ཕ་མུ་མལ་པ	アジャ・マウバ	アジャ・マウバ	<E<ZH,FBDH,FZDH,MBDH,MZDH
1	ཕ་མུ་མལ་པ	ཕ་མུ་མལ་པ	アジ・ナマ	アジ・ナマ	E<BW,FBSW,FZSW,MBSW,MZSW,
0	ཕ་མ	ཕ་མུ	アバ	アジャ	E<B(兄)
0	ཕ་མ	ཕ་མ	ヌウ	ヌウ	E>B(弟)
0	ཕ་མེ	ཕ་མེ	アジ	アジ	E<Z(姉)
0	ཕ་མེ	ཕ་མེ	サアンモ	サアンモ	E>Z(妹)
0	མལ་པ	མལ་པ	マウバ	マウバ	H,E>ZH
0	མལ་པ	མལ་པ	ナマ	ナマ	W,E>BW
0	བཞིལ	བཞིལ	ヴ。シル	ヴ。シモ	S
0	བཞིལ	བཞིལ	ヴモ。シモ	ヴモ。シモ	D
0	མལ་པ	མལ་པ	ツアオ	ツアオ	BS,ZS,
0	མལ་པ	མལ་པ	ツアモ	ツアモ	BD,ZD,

出所：2016年7月の現地調査により筆者作成

以上の8種の基本親族を中心にしながら、青海省貴徳県S村とその周辺の村で収集した調査材料を分析して地域の親族名称を表の形で述べる。

アムド地域の親族名称を見ると、年上の者にはほとんど「ア」をつけ、年下の者と区別しているのが感じられる。

チベットの親族名称について、各地域によって異なるが、共通点としての特徴は、年齢の序列を厳密に考えていることである。「チベット人は、父（アヤ）母（アマ）兄（アジョ）姉（アジェ）弟（ノ一）妹（ヌモ）のように、年上の者にはすべて「ア」をつけ、年下の者と区別している。彼等の呼び方に気をつけてみると、「親等の序列」よりも「年齢の序列」をより厳密に考えている。だから兄と弟、叔父と甥という関係は、ともに年上と年下の関係ということになってしまう（長沢1964：33）と述べており、以上の表6でも示したように、アムド地域においても、年上の者にはほとんど「ア^α」をつけているのは、以上の表6で明らかである。

五. 考察

アムド地域において、西部大開発のインフラ開発が進展してから、村落の若者たちは村を出て、町や村落と遠く離れている地域に出稼ぎに出かける傾向となった。それらの影響を受けて婚姻と家族の形態も大きく変化した。

婚姻する際に、アムド地域のみならず、チベット全地域において、「骨系或いは家系」をよく調べた上で通婚するのが一般的である。川喜田二郎が指摘しているように同じ骨の者同士は、絶対に結婚できない。すれば近親相姦であるという社会的な問題はチベット全地域の共通点であるのが以上の事例などで明らかである。しかし上述の事例5と6で示しているように同じ肉の者同士の結婚は許される。

調査対象のS村の54歳の女性は、近親間で通婚してはいけない。結婚すると、身体障害者が生まれると話してくれた。中央チベットでも「チベッ

トは近親結婚が禁止であり、父系親族は絶対に結婚してはいけない。母系親族は4世代以上離れた親族同士ならば、結婚しても構わない。チベットは交通不便であり、人数も少ない山地であるため、近親婚の例も存在したが、生まれた子供は身体障害者であった。このような例は中央チベットの林芝や米林などの山地区でよく見られる」（赤烈曲扎1985：183）。

アムド地域にとって、「骨系或いは家系」に対して、2000年代の西部大開発以前、不浄骨の世帯の人と浄の世帯の人とは通婚できず、浄の世帯の人と浄の世帯の人の間で通婚し、不浄の世帯の人は不浄の世帯の人の間で通婚していた。しかし、西部大開発以前、浄と不浄の世帯の人の間で全く通婚しなかったわけではなく、上述の事例4で示しているように少数は存在した。

西部大開発以降、インフラ整備の進展や市場経済の導入などにより、アムド地域の婚姻と家庭の形態も激しく変化した。上述の事例1, 2, 3で示すように、浄の世帯と不浄の世帯の人の間でも嫁不足や自由恋愛が原因で徐々に通婚できるようになった。また、以上の表3でも示すように、違う守護神の間でも通婚している例が徐々に出現してきた。理由としては、若者たちが村外での生活を経験することで、知り合う機会が増加し、通婚範囲も拡大した。以上に述べたように、2000年以前、若者たちが知り合う機会としては、村内の仕事や夕方の水汲み、晩ご飯後の村民館でのドラマ放映会であったが、村外での生活を経験して以降、村外の若者と付き合いが増え、伝統的な見合い結婚より、自由恋愛結婚が多くなった。見合い結婚の範囲はほとんど村内に決まっているが、表2で示すように、2000年代以降、自由恋愛結婚が多くなったため、村外から嫁入り形態（又は婿取り）が多くを占めるようになった。

村外の人と付き合いの際に、相手は「浄の世帯」か「不浄の世帯」か、守護神が違う家の者かがわからない。守護神が同じ家の者同士、「浄の世帯」と「浄の世帯」の者同士の間で付き合い合ったら、両親も結婚を許しやすいが、「浄の世帯」と「不浄

の世帯」の者同士、守護神が違う家の者同士の結婚は両親に許されることは困難である。しかし、自由恋愛結婚の事例1, 2, 3と表3で示すように、子供ができたなら、互いの家族も仕方がなく、違う守護神と世帯であっても許した。自由恋愛結婚は、経済の発展や若者の村外活動拡大の影響により、徐々に通婚範囲、あるいは若者たちの知り合う機会を、村内を超えて村外や県外に広げた。それとともに、S村の婚姻は自由恋愛結婚が増加したと筆者は考える。

地域の若い人々も出稼ぎや進学するようになったため、恋愛の範囲も拡大して、2000年代以前の通婚範囲と異なり、村外から嫁入り、婿取りする傾向が増加した。2000年代以前、通婚範囲はほとんど村落内に限られ、村内で通婚したら結婚の過程も簡単であり、離婚率も低かった。しかし、以上の表2で示すように、2000年代以降になると、村外から嫁入りの比率が高く、村内の男女同士間で通婚する比率が低くなっている。

繰り返しになるが、2000年代の初頭まで、上述したように、チベットの婚姻形式は伝統的であり、結婚の過程も非常に簡単であったが、離婚の過程も簡単であった。2000年代の初頭から子供を戸籍簿に記載する際に、子供の両親の結婚証が必要になった。それ以来結婚したら、すぐ政府に登記し、現代的な結婚の傾向となった。つまり法律上で承認する婚姻の傾向となった。アムド地域の村落において、現在も50年代以上の夫婦では結婚証を持っていない例は多い。

アムド地域においては、直系家族と核家族、大家族が多く占めており、中でも、直系家族の形態は多い。表4で示したように、S村落の世帯規模は1～4世代から成り立っており、そのうちのほとんどでは2～3世代の人が一つの世帯単位として生活している。

チベットの婚姻形態については、先行資料に基づいて分析すると、1950年代以前、主に経済的理由で複数婚姻も数多く存在していたが、1950年代からチベットで複数婚姻を行う例は減少している（包智明1992、六鹿2007、WuQi2013、林耀華

1985）。

チベットで複数婚姻をする理由について、1950年代の青海省のチベット人を調査したアメリカのチベット学者ロックヒルは、「私の調査によると、妻を与える夫は必ず兄弟である。すなわち兄がまず妻をめとり、弟も彼女と同棲する。一妻多夫制の起源は、疑いもなく貧困——つまり家族数をふやさぬためと、家族の財産を分割せぬため、この制度がつづいているのは全く貧困のためである。（中略）一夫一婦主義になれた眼からみると、チベット人のこのような結婚生活は、全く無秩序に見える。しかし、だからといってチベット人を未開と見てはいけない。（中略）チベット人の世界に一妻多夫制が見られるのは、それだけの社会的・経済的な理由と長期にわたる慣行が背後に秘められているのである」（長沢1964：32～35）と述べている。また、「チベットの財産相続は均分制なので、一妻多夫制にしておけば、兄弟が父の財産を分割しないですむ。また結婚式にかかる莫大な経費を節約することができる。何人かの兄弟がつぎつぎに遠い高原の彼方にキャラバンに赴くときには、実質的には一夫一婦制の形になるわけだ。女性の発言権の強いチベットでは、このようにでもしなければ、兄弟同士の財産分割の争いが絶えず、どうしても兄弟別居の形をとることになってしまうだろう。そうなる、瘦せた土地ばかりの農地は、ますます分割されて小さくなってしまふ。2人または3人の兄弟が1人の妻をもらえば、こうした財産分割は避けることができるわけである」（長沢1964：33）というように、経済的理由のため、チベットでは複数婚姻を行っていた。

上述で示したように、本稿では、チベット・アムド地域における婚姻と家族の形態を明確にするため、他チベット地域の婚姻形態や骨系、家系に関する先行研究をまとめて分析し、アムド地域における婚姻と家族の形態の事例を取り上げながら、チベット族の婚姻と家族形態、親族名称について述べた。さらに、西部大開発のインフラ整備が進展した2000年以降、アムド地域の村落の若

者たちが出稼ぎや就学のため村外に出るようになり、その影響によって婚姻圏の拡大と、「浄の世帯」と「不浄の世帯」のあいだ、または家の守護神が違う者同士の結婚が増加し、アムド地域の婚姻と家族形態に大きな変化が生じたと考察した。しかし、調査対象のS村落では、婚姻と複数の家族により「ツォワ」という伝統的社会集団を構成しており、その集団内の婚姻状況、つまり内婚制であるか外婚制であるかということについては、本稿で示していないため、その集団内の婚姻状況は今後の課題にする。

謝辞

本稿を作成するにあたって、平成25年度金沢大学大学院博士号（文学）を取得した宮本真晴氏より日本語の面倒やご丁寧なアドバイスをいただいた。ここで心から感謝申し上げたい。本研究は金沢大学大学院における異分野融合型教育プログラム《異分野融合型文化資源マネジメント教育プログラム》の海外フィールド派遣により研究調査を行った研究成果の一部である。

【注】

- 1 S村のインフォーマント（男、50代）によると、例えば、正月の時、早めに嫁の実家に挨拶の訪問に行く。また、嫁の実家が忙しい時、一般的に手伝いに行く。また、結婚の時も、一般的に嫁側の親族の話に従って、結婚式を行うなどの面で、嫁側の家の地位が高いのは分かる。
- 2 チベット地域は大きく三つに分かれている。それらは中央チベット地域、東チベット地域、西チベット地域という。「中央チベット地域はウ・ツァンと称せられるように、東部のウーと西部のツァンから成っている。東チベット地域はカムとアムドの二大地域に分けられる。カムはツァンポ河の大屈曲部と四川盆地のあいだ付近のことをいい、グルチュ河、ザチュ河、ディチュ河、ニャクチュ河

の大河やその支流が険しい渓谷を形成している。アムドは現中国青海省から甘粛省西南部や四川省北西部にかけての地域をいう。西チベット地域はガリと呼ばれる。乾燥した厳しい気候のもとにあるが、それでもインダス河、サトレジ河、ツァンポ河の大河川の源付近には居住可能な渓谷がある」（石川2009：12～14）。

チベット全地域の地勢は西のほうが高地、西から徐々に低い地勢になっている。地勢の高さによって上部、中部、下部と三つに分けられ、順番にガリ（mnga' ris）は沢にたとえられ、ウ・ツァン（dbus gtsang）は灌漑用水路にたとえられ、ドカム（mdo khams）は水田にたとえられていると古代史料に記載されていた。言い換えれば、上部のガリは三つの地区となり、中部のウ・ツァンは四つの地区となり、下部のドカムは六つの山地となる。

- 3 アムド方言は、チベット地域における三大方言の一つである。その三大方言は、①ウ・ツァン方言（前蔵・後蔵）、②カム方言（康）、③アムド方言である。吐蕃時代に、チベット語は三回改革（skad gsar bcad）を行ったが、アムド地域は中央チベットとは距離的に遠く、改革の影響を完全に受けなかったため、古代言語が多数残っている。それがアムド方言の特徴であると言語学界で言われている。
- 4 村人によると、21世紀以前、S村では、一般に言えば、男は18歳、女は16歳になると、結婚すべき年齢であると見なされていた。
- 5 ハデンラモについて、沃杰科维茨（1993：27）は、「チベット仏教ゲルク派の主要な女守護神であり、彼女の化身であるマジュハデンラモは西藏ラサ地域域の主要な女守護神である」と記述している。
- 6 チィランの語彙について、歴史文献の中でte' u rang, the' u rang, theb rang, the bu rang, the' u rangsなど違う文字で記載しており、チィランの由来、各地域への伝播、特にアムド地域の民間習俗では、チィランに注意することやその原因について『中国蔵学』に記載されている「sha bo mkha' byams2011」。
- 7 筆者が調査村に滞在している時に、意外なことが起こった。それは「ハデンラモ守護神のある家がチィランの家の知り合いに金を貸して、返す期間を過ぎて2年経ったが、返してくれなかった。チィランの家は保証人であるため、ハデンラモ守

護神のその家長が保証人であるチランの家のトラクターを縛って持ってきた。その翌日、トラクターを使う時、家長の手が機械に入ってしまった指を切ってしまった。その時、チランの家が怒ったせいであると考えた。また、40代の男性は「数年前であるが、同じこのチランの家の家長と放牧に行った。夜、一つのベットに寝ていると、夢の中で身体に猫が這ってきた。怖かったので「ゼルーウ（現地語で猫に対する叱る言葉）」と殴ってすぐ起きたら、隣に寝ている家長も起きた。その家長にどうしたと聞かれたが、その猫が彼であるのが私は分かった。彼は分からないらしかったが、言うとはよくないため、夢を見ただけだと返事した。チランの家は本当に存在する」と話してくれた。

【参考文献】

チベット語・文献

- [ming sring dpal bgos dang lha `dog]. In Samten.G Karmay and Yasuhiko Nagano (eds), 『The Call of the Blue Cuckoo』 2002, pp217 - 227. Osaka: National Museum of Ethnology.
- ‘ba` stod tshe dbang rdo rje 2011 「bod p`I gnyen ston khrod du mda` mo spyod stangs dang de`I mtshon don skor gleng ba」 『mtsho sngon mi rigs slob chen rig deb』. ppl - 13. mtsho sngon mi rigs slob chen rig deb rtsom sgrig pu`u. (巴頓・才項多杰「藏族婚礼中箭交換习俗及其文化内涵」『青海民族大学学报』 2011・1: 1-13 青海民族大学学报編輯部) sha bo mkha` byams
- 2011 「the` u rang gi byung ba la brtag pa」 『krung go bod rigs pa』 (中国藏学 第1期). krung go bod rigs pa zhib` jug lte gnas (中国藏学研究中心) .

日本語・文献

- 石川巖 2009 「チベットの歴史とボン教の形成」 長野泰彦 (編) 『チベットボン教の神々』 国立民族学博物館
- 大川謙作 2007 「一妻多夫婚研究における文化vs社会経済モデルの再検討: チベット系諸民族における婚姻諸形態とその選択をめぐって」 『東洋文

化研究所紀要』 第150冊, pp.246-206. 東京大学東洋文化研究所

- 川喜田二郎 1966 「チベット族の一妻多夫一(1) — Torbo民族誌・その4 —」 『民族学研究』 31-1: 11-27
- ガザン 2016 『チベット村落における伝統的社会集団と死生儀礼の文化人類学的研究』 金沢大学, 修士論文
- ガザンジェ 2015 『中国青海省チベット族村社会の変遷過程』 金沢大学, 博士論文
- 棚瀬慈郎 1991 「留まろうとするものと移りゆくもの— インド, ヒマールチャル・プラデッシュ州, ラホール渓谷のチベット系社会における家と家族 —」 『民族学研究』, 56-2: 159-177
- 中根千枝 1973 『家族の構造』 東京大学出版会
- 長沢和俊 1964 『チベット 極東アジアの歴史と文化』 校倉書房
- 包智明 1992 「チベット牧畜民社会の親族構造 — チベット北部の事例から」 『民族学研究』 56-2: 53-61
- 六鹿桂子 2011 「チベット族における兄弟型一妻多夫婚の形成理由の考察」 『多元文化』 pp145-157
- 2007 「チベット族の村の比較から婚姻を観る— 雲南省迪慶藏族自治州徳欽県の事例から」 『日本西藏學會々報』 pp45-58
- I・デシデリ 1991 『チベットの報告I』 東洋文庫542, 薬師義美 (訳) F・デ・フィリップ編, 平凡社
- 中国語・文献
- 才項多杰 2012 『论中国藏族社会的箭崇拜习俗 (On the custom of arrow worship in the Tibetan society of China)』 西南民族大学・博論
- 丹珠昂奔 2013 『藏族文化發展史 (上・下)』 中央民族大学出版社
- 貴徳県統計局 (編) 2011 『2011年貴徳統計年鑑』
- 格桑 他編 1993 『藏北牧民— 西藏那曲地区社会历史调查』 中国藏学出版社 2006 『格桑人类学, 藏学論文集』 中国藏学出版社
- 金晶 2009 「从游牧到定居的藏族婚姻家庭变迁 — 以甘南藏族自治州藏族牧民定居点为例」 『安多藏族自治州社会文化变迁研究』 苏发祥 (主編) pp155-176 北京: 中央民族大学出版社
- 勒内・德・内贝斯基・沃杰科维茨 (Nebesky-Wojkowitz) 1991 『西藏的 神灵与 鬼怪』 (『Oracles and Demons of Tibetan』 チベットの神託と悪霊) 謝

繼勝（訳）, 西藏人民出版社

林耀華 1985『民族学研究』中国社会科学出版社

赤烈曲扎 1985『西藏風土志』西藏人民出版社

英語・文献

Jixiancairang 2012 “Tibetan Wedding Rituals in Gling rgya Village in Reb gong, A mdo”. UNIVERSITY OF OSLO (RELTIB4990 – Master’s Thesis).

WuQi 2013 “Tradition and Modernity: cultural continuum and Transition among Tibetans in Amdo”. University of Helsinki.